死刑囚はいかに自分の生を受け入れるのか

―『無知の涙』と『遺愛集』の検討から―

廣井　いずみ*

How do death-row inmates consider their lives?
―An analysis of the works *Muti no Namida and Iaisyu*―

Izumi HIROI

要　旨

死刑の確定判決を受けた者については、病的な側面が取り上げられることが多かったが、本研究では肯定的側面に注目する。死刑囚は自己の否定的側面を意識して死を待つだけではなく、残された生に肯定的意味づけを為し得ることもあるのではないか、為し得るとしたらいかに為されるのかをテーマに、死刑囚島秋人、同永山則夫の残した作品について質的分析を行った。島は、短歌を通して人とつながることで、自分の才能を開花させ、かつ残された生を豊かにすることを可能にした。永山は思索することにより、実存的に自己の生を捉えるようになり、表現することで外の世界につながることが出来ることを知った。両者ともつながることが、残された生の肯定的意味づけへの鍵となることを明らかにした。

【キーワード】死刑囚、肯定的意味づけ、つながる

Ⅰ　はじめに

本研究は、死刑の確定判決を受けた者が、いかに自分の生を受け入れていこうとするのかをテーマにする。死刑囚の精神状態や心理についての研究には、稲村（1973）[1]、福島（1998）[2]、加賀（1980）[3] などがある。死刑囚の置かれた状況から、精神の異常性に注目する研究が多いが、本研究ではいかに残された生を生きるのか、肯定的側面に注目する。

このテーマに注目したのは、パスカル[4] が述べたように、我々はみな死刑を宣告されているようなもので、有限の生を生きる点では、死刑囚と同じであり、より強く生の有限性を感じ取る死刑囚にこそ、生きることへの取り組みが明瞭に現れるのではないかと考えたからである。加賀（前掲書）が、死刑囚である正田昭の「死刑囚が存在することは悪であり、生きていることは恥である」、「死刑囚であるという状態は、悪人として死ねと命令されていることだ」という言葉を引用し、死刑囚の死は、私たちの死と違うという見方があることを示している。筆者は、正田の

平成27年９月16日受理　*社会学部心理学科　教授

言うように、自己の生に対する否定的な意味づけがあるとしても、有限の生を生きる点では、死刑囚と我々では共通の姿勢が見られるのではないかと考え、本研究のテーマとした。

正田の述べるように自己の否定的側面のみを意識して死を待つとするなら、精神的に破たんするのではないだろうか。自分の人生について、何らかの肯定的な意味づけをしようとする営みもあるのではないかと考えた。肯定的意味づけは、果たして生まれるのか否か、生まれるとするなら、どのようなプロセスから生まれるのか、二人の死刑囚の作品から探りたい。『無知の涙』の著者である永山則夫[5]と『遺愛集』の著者である島秋人[6]注１）について、それぞれの著作物を検討の材料とする。この２人を選んだのは、男性の若年犯罪者であり、殺人の単独犯である点で共通していること、いずれも文学的な才能を世に認められ、著作物が残っていることである。

Ⅱ　『遺愛集』島秋人の検討

１．島秋人の起こした事件及びプロフィール

（ア）事件

島（前掲書）[6]によると、昭和34年、飢えにたえかねて農家に押し入り２千円を奪い、争ってその家の人を殺した。

（イ）プロフィール

「昭和９年６月28日生まれ、幼少を満州で育った。戦後父母ともに新潟県柏崎市に引揚げたが母は疲労から結核になりまもなく亡くなった。本人も病弱で結核やカリエスになり、７年間もギブスをはめて育ったが小学校でも中学校でも成績は一ばん下だった。まわりから、うとんじられるとともに性格がすさみ転落の生活が始まった。少年院にも入れられた。」（島、前掲書）

（ウ）『遺愛集』に登場する人物

吉田好道：中学の時ほめてくれた先生

吉田絢子：先生の奥様

窪田空穂：芸術会会員で歌人として名高い。

窪田章一郎：空穂先生のご長男、早大教授

前坂和子：高校生のころから花の差入れをつづけ長い間彼を励ましてきた人

千葉てる子：心の支えとなり、のち養母となる

鈴木和子：盲目重病の人、手紙で愛を誓いあう。

（島、前掲書）

２．分析方法

『遺愛集』は、島秋人による、年代別に構成された短歌集である。はじめて作った短歌から、受刑するまでの作品が収められている。

この歌集を題材に、次の二つの分析を行った。まず、『遺愛集』に掲載されている短歌のうち、登場人物が明らかとなっている短歌を選び、描かれているテーマをSCATにより抽出した。登場人物が描かれている短歌を選定したのは、上記のように登場する人物の説明が冒頭に為されており、島の、人との関係を重視する姿勢が現れているのではないかと読み取ったことからである。

分析方法のSCATとは、Step for Coding and Theorizationの頭文字を取ったものである。まず、着目すべきデータを切り取り、以下の順でコードを付す。＜１＞テクスト中の注目すべき語句、＜２＞テクスト中の語句の言いかえ、＜３＞左を説明するようなテクスト外の概念、＜４＞テーマ・構成概念の順である。次いで、＜４＞のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述する。「この手法は、１つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの、比較的小規模の質的データの分析にも有効である」（大谷、2011）[7]ので、短歌の分析においても使用可能と考え、SCATを使うこととした。ただし、限られた文字数から、テクスト外の概念を引き出すのは困難と考えたので、「＜３＞左を説明するようなテクスト外の概念」は省いた。

SCATの抜粋（昭和36年）を表１に示し、これに従い、どのように分析をしたのかを示す。

表１　遺愛集　ＳＣＡＴの抜粋

番号	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
1	亡き母に呼ばれし呼び名が師の妻の便りにありてなつかしく読む	亡き母　呼び名　師の妻	母との関係　師の妻との関係　だぶる	師の妻の便りに亡母を思い出す	
2	車窓過ぐる故郷見れば幾度もガラス拭きくるる老いし看守は	車窓　故郷　幾度も　拭き　看守	移送のとき　懐かしい故郷　もう帰れない　筆者の万感の思いへの共感　心にしみる	移送の時に車窓からみた故郷への望郷の念　看守の心遣いへの感謝	
3	風塵にさからう如く立哨の動かぬ看守見てゐてさびし	風塵　さからう　立哨　看守　さびし	風に舞う埃　よけもせず　姿勢を崩さない看守　物寂しさ	看守　厳しい自然にも微動だにしない　職業柄とはいえ物寂しい	自分のことか看守への思いやりか？
4	師の妻より賜ひし浴衣獄の夜に時をり覚めては見入る	師の妻　賜ひし　浴衣　獄　夜　見入る	差し入れの浴衣　家庭を思い出させる	差入れの浴衣に家庭の味を味わう	
5	移送の日に汽車のガラスを拭きくれし老いし看守に暑中見舞ひ書く	移送　ガラス　拭きくれし　老いし看守　暑中見舞ひ	移送の時の心遣い　恩人　気づかい	移送の時の暖かな心遣いに感謝	
6	老看守まともに笑顔みせくるるうたがはれぬ日のわれはうれしも	老看守　まともに笑顔　うたがはれぬ　うれし	獄の生活　看守からどう見られているのか　認められるとうれしい　父親に認められたよう	看守の目顔気になる　認められるとうれしい	老看守への良い感情ある
7	たどりきて寝返りうちぬ死刑囚の憶ひの内に母の死があり	たどりきて　寝返り　憶ひの内　母の死	やっと着いたと思ったら　夢の中　母は亡くなっていた　心細い心境	つらいとき　母の支えを求める　が母はすでにいない	
8	甘ゆべき母のなき獄青布の夜具をかぶりて悲しみに耐ふ	甘ゆべき母なき　夜具をかぶり　悲しみに耐ふ	甘えたいけれど　母はすでにいない	母への甘えの気持　満たされない寂しさ	
9	母のなきわれは亡母恋ひ夜を更かし獄に遠き汽笛ききたり	亡母恋ひ　夜　汽笛	もう会えない母　遠い故郷　懐かしさ募る	亡母を恋い慕う気持ち　寂しさ	
10	過ぎし日の父の姿をまねてゐぬ冬の日向に死囚となりて	父の姿　まねて　日向　ゐぬ　死囚	日向ぼっこ　父似　死刑囚になったこと父に申し訳ない	父を慕う気持ち	
11	握手さえはばむ金網目に師が妻の手のひら添えばわれも押し添ふ	握手はばむ　金網目　師が妻の手のひら　われも	金網越しに手を重ねる　情感の通い合う別れ	師の妻との交流　金網越しがもどかしい	
ストーリーライン（現時点で言えること）		亡母、父、故郷を思い、さみしさを募らせる。師の妻の差入れに心なごむ場面もある。日々の暮らしでは看守の監視の目がきになったり、厳しい規律にさらされ、ものさみしい思いをしている。			
理論記述		・故郷、家族を懐かしみ、そこから切り離された我が身を思い、悲しみ、心細く感じる様子。 ・獄中での暮らしは厳しいが、そのような生活の中で師の妻の面会、老看守への暖かさに救われている。			
さらに追究すべき点・課題		繰り返し、老父、亡母が出てくる。人を慕う気持ちの強さは、この作者の特徴であろうか。			

最初の歌である「亡き母に呼ばれし呼び名が師の妻の便りにありてなつかしく読む」から、〈1〉テクスト中の注目すべき語句として、亡き母、呼び名、師の妻を抽出した。この歌が詠んでいる情景は、師の妻から受け取った手紙の中に、幼い頃の自分の呼び名を見つけて懐かしんでいる様子であろうと想像した。そこで〈2〉テクスト中の語句の言いかえは、母との関係、師の妻との関

係　だぶるとした。〈4〉テーマ・構成概念は、師の妻からの手紙により、亡母への思慕が掻き立てられたのであろうと考え、師の妻の便りに亡母を思い出すとした。

昭和36年に詠まれた番号１から11までの短歌のテーマ・構成概念をとおして見ると、故郷、家族への気持、現在の厳しい生活、獄中での人との出会いの暖かさなどが描かれている。これらを、ストーリーラインとしてつなげて記述した。ストーリーラインから重要部分を抜粋し、要約し、理論記述とした。

次に、掲載されているすべての短歌を対象に、感情にかかわる用語を拾い出し、年ごとに、各感情の度数をグラフで示した。

３．結果

最初に、その年に島が出した手紙から読み取れる近況、心情を抽出し、その後にその年の短歌のＳＣＡＴによる分析結果を記し、さらにその年に詠まれた短歌全体を対象にして分析した感情の種類と度数を示す。

（ア）昭和35年　初めて短歌を、小説新潮に投稿し、佳作となった。

中学時代の恩師である吉田好道先生と手紙のやり取りが始まる。

この年は２首のみ詠む。花を通して看守部長の温かみを感じる歌、寂しさに圧倒される毎日を送っていることが読み取れる歌の二首を詠んでいる。

（イ）昭和36年　この年から「毎日新聞」に投稿する。

吉田先生の妻、絢子が面会に来るようになる。吉田絢子は、島に短歌を詠むことを勧めた人。短歌による表現を知ったことは、国民学校時代から低能扱いされた作者にとって、心の灯となったという（島、前掲書)。

・この年の短歌の理論記述から

故郷、家族を懐かしみ、そこから切り離された我が身を思い、悲しみ、心細く感じる様子。獄中での暮らしは厳しいが、そのような生活の中で師の妻の面会、老看守への暖かさに救われている。繰り返し詠まれている人物は老父、亡母である。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

図１から見ると、他の年に比較し、感情の表出は種類においても量においても少ない。慣れない獄中の生活のほかに、歌を詠み始めて日が浅く、どのように表現してよいかわからない点があったかもしれない。

（ウ）昭和37年　この年、作者の短歌が「タイム」に紹介される。

この年に死刑が確定、受洗。死刑が確定したことにより、さみしさを募らせた時期であったと考える。しかし寂しいだけでなく、「クリスチャンとなっても生きるだけ生きたいものだ。只生きているという意味でなく、何か作りあげつつ生きてゆくと言う気分だ」と述べる。

・この年の短歌の理論記述から

死刑が確定した時の悲しみ、人、特に母親的な人への甘えが自然に謳われている。父に対しては、気遣う気持ちが強く出ている。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

感情の表出は、前年に比べると多様になっている。その中でも、「さびしい」気分がもっとも多く表現されている。死刑の確定も影響を与えているであろう。

（エ）昭和38年 「毎日歌壇賞」受賞。この年に、父が面会に来る。

窪田空穂への手紙の中で、短歌は「新しい心の僕の分身」と表現し、「感謝もあり、生きる尊さを知った歓びもあり、幸福感もある」（島、前掲書）と述べる。短歌という表現方法を与えられた喜びを感じ、生きる張り合いが生まれたのではないかと考える。

・この年の短歌の理論記述から

老父との面会を待ち侘びるさま、会えた時の父を気遣う様子、亡母にきつく叱られたことを繰り返し思い出し、懐かしむ気持ちが謳われている。亡父以外では、支援者である前坂と師の妻との交流を楽しむ様子が描かれている。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

図１からは、「さびしい」が３番目に後退し、「愛おしい」、「笑む」が上位に来ている。「許さるる限りの生を愛ほしみちひさき事に幸を得て生く」に現れるように、与えられた運命を肯定的に受け取る姿勢が見て取れる。宗教的な帰依も影響していると考えるがそれだけでなく、作者自身が「現在の幸福感、安心感は多くの人々の親切によって作られた、恵まれた、かんきょうによる」と述べているように、短歌を通した人とのつながりによるところも大きいであろう。

（オ）昭和39年

窪田空穂との手紙のやり取りの中で、書き溜めた短歌の出版についての依頼を行っている。受賞もし、歌人としての地位を築きつつある時期である。窪田からは精神的な支持を得ており、作者の自尊心を高めるのに役立っている。また手紙の中で、飼っている文鳥との共同生活の楽しさも、窪田に伝えている。死刑囚ではあるが、穏やかな幸せを感じる日々もあったと考える。

・この年の短歌の理論記述から

自分自身を愛おしむ気持ち、自信が現れている。出版による印税で親孝行できた喜び、自分の功績への誇りが読み取れる。しかし、自分がその家に住めないことの悲しみも詠まれている。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

全体を通して読み取れる感情の種類がもっとも少なく、「愛おしい」「愛おしむ」という語が集中して使われた年であることがわかる。「愛おしい」「愛おしむ」の次に「愛しい」（かなしい）が挙がっている。古語大辞典[8]によると「かなし【悲・哀・愛】」は、①不運・失敗・失望などのために満たされない気持ちを持つ心のさま。②肉親や恋人をせつないまでにかわいく思う気持ち。③他人の不運や逆境に同情する心のさま。④対象に触れて、しみじみと胸をうつ情趣を感じる心のさま。⑤対象の尊厳や好意にうたれて深く感じ入るさま。⑥他の行動をほめたたえる気持ちを表す。39年の作品を見ると①の満たされない気持ちを謳ったと読み取れる。満たされない気持ちをうたった歌ではあるが、「悲」や「哀」ではなく、「愛」

の字を使用している点に、人に強く惹かれる心情が込められているのではないかと考える。

（カ）昭和40年 「信仰の姉に、角膜・遺体献納の為に必要と養母になってもらい、母を得る」（島、前掲書）

前坂和子への手紙に、母を得た喜びについて、「おかあさんと書いたりつぶやいたりするとき、心がおだやかに幼くなっている。母っていいね」（島、前掲書）、また窪田空穂への手紙に、「母は、指一本触ることなく死ぬだけの子にとてもよくしてくれます」（島、前掲書）と書いている。養母になってもらったことへの感謝の気持ち、母を得たことで一層の情緒的安定を得たことが伝わってくる。

・この年の短歌の理論記述から

献体の為に養母を得る。養母になってくれたことへの感謝の気持ち、養母との面会を待ち侘びる様子が描かれていえる。母を持つ暖かさ、幸せを感じている様が伝わってくる。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

第１位に笑み・笑顔が来ているところに、作者の喜びが察せられる。４位以下に「優しい」、「甘える」、「温とい・あたたかい」、「安らう」、「足りる」が並び、養母を得たことで充足感が得られたことが感じ取れる。38年の内容と共通するものがあるが、38年との違いは、この年には「さびしい」が出なかったことである。

（キ）昭和41年 「自愛心を得て、幸福感深む」（島、前掲書）

窪田章一郎への手紙で、自分の生きる姿勢について「嘘のない、裸になりきるもの、かざり気のないもの」と述べる（島、前掲書）。

・この年の短歌の理論記述から

恩師の出版祝い、妹の結婚とめでたいことを祝う気持ちと同時に、獄中にあって、ともに喜びあえない状況を悲しむ気持ち。老父を案じる気持ち。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

「愛おしい・愛おしむ」、「愛しい」（かなしい）が、１、２位を占め、また感情の幅も広がっている。「澄む」という感情がはじめて登場する。作者の中に「澄む」という言葉に呼応する心の状態があるのではないかと考える。

（ク）昭和42年 「師父、窪田空穂先生の御死去。病床の和子を知り愛を結ぶ」（島、前掲書）

窪田章一郎宛の手紙が１通、養母宛の手紙が２通紹介されている。窪田宛の手紙では、受賞に向けて精進したいこと、お金をためて被害者に送金したいことが書かれている。

養母宛の手紙では、趣が変わり、虫や鳥の細やかな様子をテーマに、小動物の生きるさまを細やかに観察した様子を知らせている。子どもが母親に、今見てきたものを報告するかのようである。養母の２通目の手紙には、結婚への夢を語っている。病床の和子との愛を念頭に書かれたものと考えられる。愛を知り、生命を惜しむ気持ちが出てきたこと、殺される死を待つさびしさにも触れている。

・この年の短歌の理論記述から

養母との穏やかな交流、花を送り続けてくれた前坂への感謝の気持ち、彼女らとの交流を通して感じるのだろうか、亡母との暖かな思い出も詠まれる。亡母をとおして湧いてくる自

分への愛おしみの気持。他人の母の命を奪った自責の念。処刑前夜、親しい人への感謝の気持ちを詠む。この年には、盲目で重病の和子への燃えるような愛の歌を重ねて詠んでいる。

・この年の短歌に詠まれている感情の種類と頻度

この年は、感情の種類がもっとも豊富に表現された年である。燃えるような愛をテーマに連作で詠んでいるが、全体としてみてみると、穏やかな感情の表出が多い。恋人への愛情は、生きることへの充実に寄与したのではないかと考える。

表２　『遺愛集』理論記述

番号	年	理論記述
1	昭35年	この年は２首のみ。花好きの作者、花を通して看守部長の温かみを感じる優しさが現れている歌。寂しさに圧倒される毎日を送っていることが読み取れる歌の二首。
2	昭36年	・故郷、家族を懐かしみ、そこから切り離された我が身を思い、悲しみ、心細く感じる様子。 ・獄中での暮らしは厳しいが、そのような生活の中で師の妻の面会、老看守への暖かさに救われている。
3	昭37年	・死刑が確定した時の悲しみ ・人、特に母親的な人への甘えが自然に謳われている。 ・父に対しては、気遣う気持ちが強く出ている。
4	昭38年	・老父との面会を待ち侘びるさま、会えた時の父を気遣う様子 ・亡母にきつく叱られたことを繰り返し思い出し、懐かしむ。 ・亡父以外では、支援者である前坂と師の妻との交流を楽しむ。
5	昭39年	・自分自身を愛おしむ気持ち、自信 ・出版による印税で親孝行できた喜び、自分の功績への誇り ・自分がその家に住めないことの悲しみ
6	昭40年	・献体の為に養母を得る。 ・養母になってくれたことへの感謝 ・養母との面会を待ち侘びる様子 ・母を持つ暖かさ、幸せを感じている。
7	昭41年	・恩師の出版祝い、妹の結婚とめでたいことへの祝い、喜び合う気持ちと同時に、ともに喜びあえない状況を悲しむ。 ・老父を案じる気持ち
8	昭42年	・養母との穏やかな交流、花を送り続けてくれた前坂への感謝の気持ち ・彼女らとの交流を通して感じるのだろうか、亡母との暖かな思い出 ・亡母をとおして湧いてくる自分への愛おしみの気持 ・他人の母の命を奪った自責の念 ・盲目で重病の和子への燃えるような愛の歌 ・処刑前夜、親しい人への感謝の気持ちを詠む

各年の感情の種類と頻度をグラフ化すると、次頁のようになる。

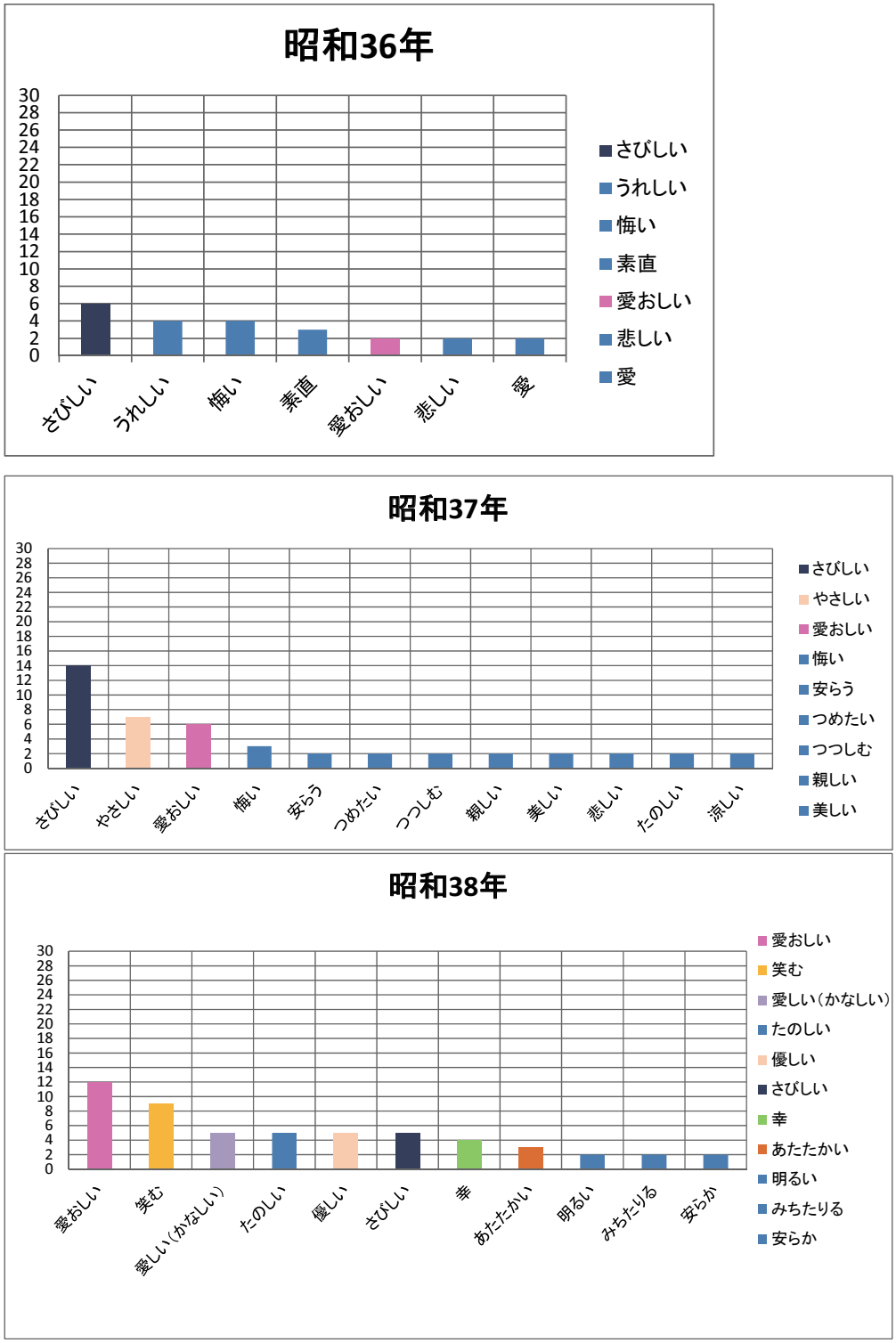
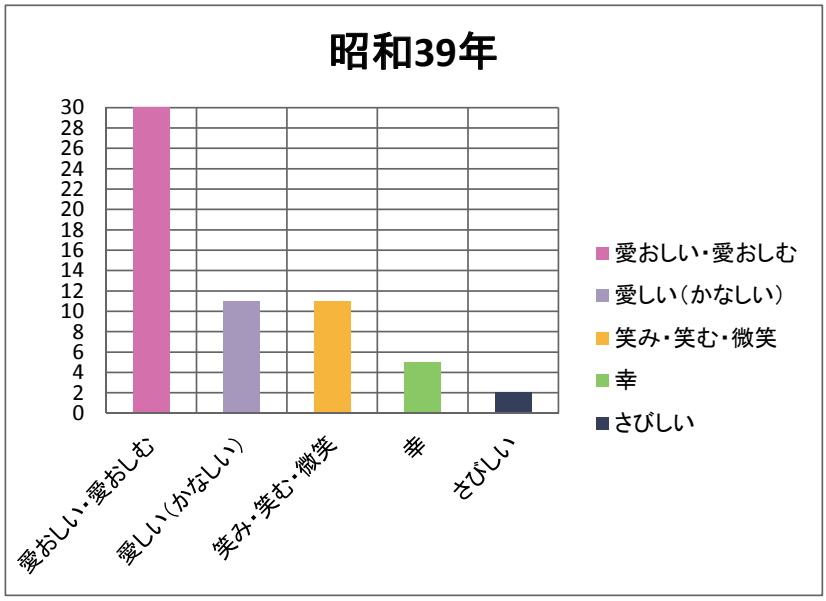

昭和36年
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
さびしい
うれしい
悔い
素直
愛おしい
悲しい
愛
さびしい
うれしい
悔い
素直
愛おしい
悲しい
愛
昭和37年
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
さびしい
やさしい
愛おしい
悔い
安らう
つめたい
つつしむ
親しい
美しい
悲しい
たのしい
涼しい
さびしい
やさしい
愛おしい
悔い
安らう
つめたい
つつしむ
親しい
美しい
昭和38年
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
愛おしい
笑む
愛しい（かなしい）
たのしい
優しい
さびしい
幸
あたたかい
明るい
みちたりる
安らか
愛おしい
笑む
愛しい（かなしい）
たのしい
優しい
さびしい
幸
あたたかい
明るい
みちたりる
安らか

図１　感情の種類と頻度


昭和39年
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
愛おしい・愛おしむ
愛しい（かなしい）
笑み・笑む・微笑
幸
さびしい
愛おしい・愛おしむ
愛しい（かなしい）
笑み・笑む・微笑
幸
さびしい

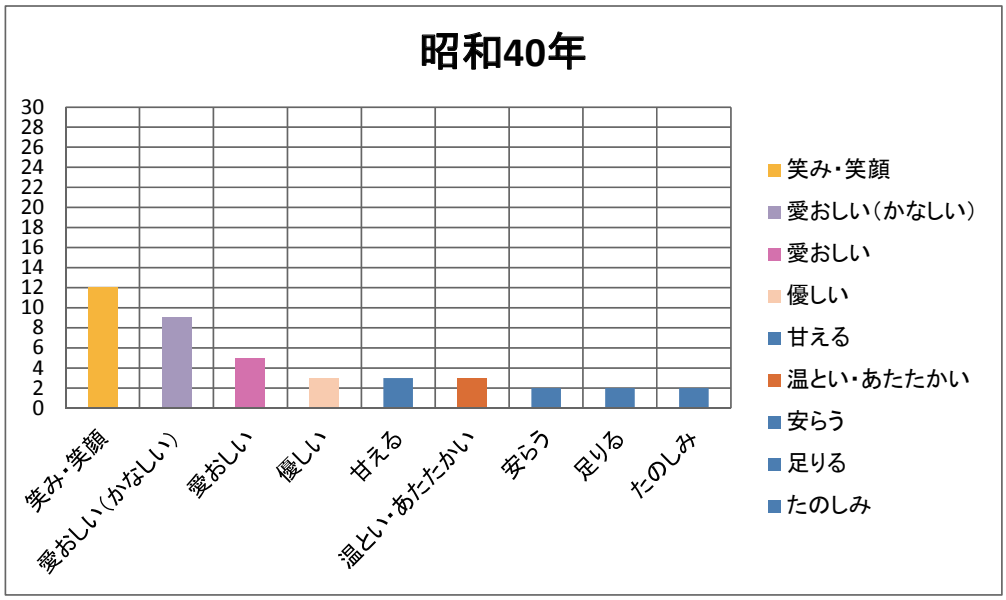
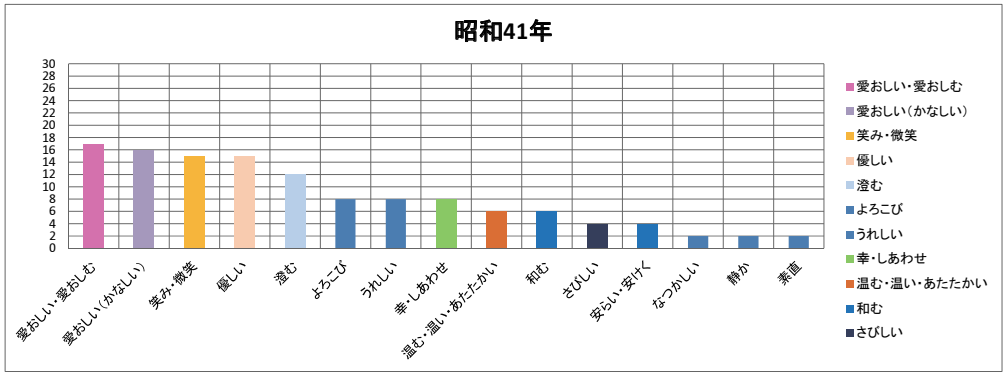

昭和40年
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
笑み・笑顔
愛おしい（かなしい）
愛おしい
優しい
甘える
温とい・あたたかい
安らう
足りる
たのしみ
笑み・笑顔
愛おしい（かなしい）
愛おしい
優しい
甘える
温とい・あたたかい
安らう
足りる
たのしみ

図１　感情の種類と頻度



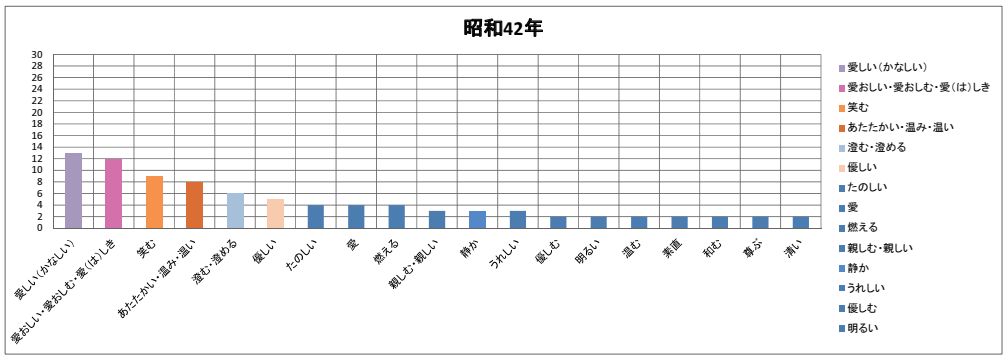


図１　感情の種類と頻度

４．考察

（ア）島秋人について、短歌及び書簡から見る人物理解

・弱いもの、小さいものへの感受性

島の短歌には虫、鳥などの小さい生き物の生きている様が細やかに描かれている。もともと花が好きであったり、自然の移ろいに関心が強かったりする人なのであろうとは思うが、それにもまして作者自身が病弱であったところや、社会から疎んじられてきたことなどから、弱いものや小さいものに親近感を感じ、自己を投影しやすいところがあったのではないかと考える。

・愛おしむ・愛おしい・愛しい（かなしい）という語が多用されていること

愛おしむは、「命」、「我が身」に続いて多く使われている。「去りゆくものや離れねばならぬものを愛惜する。去りがたく思う」（角川古語大辞典）[8] の意味で使われており、限りある生を強く意識して謳ったものと考える。愛おしいは、花、鳥など小さく可憐な対象が謳われた短歌に見られる。弱さ、はかなさへの思い入れは、我が身のはかなさにも通じるものがある。

・甘えの出し方

島は、35 年に謳った「君が植ゑた朝顔がよく咲いたよと看守部長の便りとどきぬ」にあるように、人の志の暖かさを感じ取り、それを表現する能力を持っている。新たに出会った人

にも、子どもに返ったように素直に甘えを出せる点がある。また父、師の妻、義理の姉（後の養母）、前坂和子との面会を楽しみにしている様子も描かれている。そして面会後の嬉しい、感謝の気持ちを短歌に表わしている。甘えを素直に出せる点が、島の強みとなり、複数の親密な人とのつながりを確かなものにしている。

（イ）人とのつながり

・二人の母

作者には二人の母がいる。亡くなった実母と養母である。亡母の思い出では、幼い頃に戻ったかのように、親しみ、甘えを出している。叱られるという否定的な行動でさえ、母子の懐かしい思い出と捉えられる。幼い頃の母子間の絆の深かったことがうかがえる。

養母を得たのは、島の献体のために必要というのが理由である。年齢差からすると、養母は母と云うより姉に近い。慎み深く、優しい養母は、島の精神的安定を助ける。

・二人の父

島にとって実父とは、学もなく、弱々しく、いたわるべき相手である。また自分の故郷につながる大切な存在である。一方、窪田空穂は短歌の師にとどまらず、精神的な支柱であったのではないかと考える。島にとって窪田は、老いても手の届かぬ存在であり、自分の行き先を照らしてくれる存在として師父を位置づけている。

・愛を誓った鈴木和子

鈴木和子とは、文通だけの交流である。重病であり、目が見えないことが、直接刑務所に出向くことを阻んだ。島自身も病弱であること、そして狭い空間から動けないことが、鈴木との共通点となる。

鈴木との愛情は、プラトニックラブでは済まされないほど濃密な表現となっている。ここまで愛情が掻き立てられることによって、死への拒否感が強まることはなかったのだろうかと思うが、むしろ死の間際まで、穏やかな感情が謳われている。この流れから考えると鈴木との情熱的なつながりは、生への執着ではなく、むしろ作者の死の不安を鎮める方向に働いたと捉えるのが妥当ではないかと考える。

・支援者であり続けた前坂和子

前坂は、作者に花を送ることを6年間続けた女性であり、処刑前夜にも訪れている。精神的に島を支え続けた人である。島に届けたのは花だけでなく、文学に関することなど知的な刺激も含まれていた。作者にとって得難い存在であったことには違いないであろうが、短歌に登場する回数は限られている。作者とは異なり、勉学に秀で、強く生きる女性で、他の女性に比べると、情を動かされることは少なかったということか。作者の創作活動を、側面から支え続けた人という位置づけがふさわしい。

・人とつながることへの貪欲さ、巧みさ

以上みてきたように、女性はそれぞれが異なる役割を担う。それぞれの女性とのつながり方が、島の中では明瞭になっている。まるで疑似家族のようでもある。人とつながることは、不安を鎮めることに役立つが、それだけでなく次に述べる創造的に生きることにもつながる。恩師や窪田空穂への手紙には、近況報告だけでなく自分の気持ちを丁寧に伝えようとする姿

勢が現れる。たとえば恩師には、学生時代にただひとつほめられた思い出を伝えて、恩師とのつながりを築こうとしている。また必要な時には、知らない人であっても自分から手紙を出してつながろうとする。つながることに秀でており、また人とつながることで、自分が生かされることを、体得している人である。

（ウ）島秋人はいかに自分の生を受け入れたのか

・低能児から歌人へ

小学校５年の時に、国語で零点を取り、先生に叱られたという作者が、短歌の才能を恩師夫妻により引き出され、毎日歌壇で受賞する歌人となる。新聞に投稿することで、多くの人々の関心を引くとともに、窪田空穂の目にとまり、指導を仰ぐまでになる。自分の感性と表現力、構成する力が認められたのであるから、大きな自信となり、自尊心を高めることになったにちがいない。

・人とつながることと創造性

Winnicott,D.W（1979）[10] はセラピーの中で遊ぶことが出来るようになると、「自分自身を突然発見する」という。島の短歌のように創造的な営みは、ここで言う「遊び」に含まれる。そして遊びは、相手との関係性があるときに生まれる。セラピーであれば、セラピストとクライエントとの関わりであるが、島の場合には、師とのかかわり、読者とのかかわり、愛する人や生き物とのかかわりのなかで生まれた。無心に遊べるようになるとは、島の素直に気持ちを歌にするときの姿勢に通じる。遊ぶことが出来るようになると、自分自身を突然発見する。すなわち、自分自身の存在性（being）を発見する。

創造的であることとは、芸術作品をつくることに限られるのではなく、生き生きとした自分を取り戻すことである。短歌を作成することで、島はもっとも島らしくあり得たと考える。

Ⅲ　『無知の涙』永山則夫の検討

1．永山則夫の起こした事件及びプロフィール

（ア）事件

1968年10月から11月にかけて、東京、京都、函館、名古屋で起きた連続射殺事件。

（イ）プロフィール

1949年、８人兄弟の四男として出生。永山が生まれた当時、両親の関係は既に破たんしていた。父は博打好き、仕事はしていなかった。父に代わり母が働きに出、母の代わりに長姉のセツが永山を育てた。しかし、その姉は精神疾患に罹患し、入院となる。４歳の時に母は家を出、網走の地に子どもだけが置き去りにされる。その後、家族が再会するが、家庭では、母からの折檻、兄からの虐待が繰り返され、学校ではいじめの対象となり、貧民街の子として排除された。父は長期の別居の後、死亡。永山は中学卒業後、上京するが、人間関係がうまく行かずつまずく。唯一頼れるところとして兄姉のところに行くが、皆自分の生活に手いっぱいで断られ、孤立へと追いやられる（堀川、2013）[11]。

永山は厳しい生育環境にもかかわらず、独学で哲学書を読み、自分なりの理解を文章化す

るほどに能力がある。

2．分析方法

永山（1990）による『無知の涙』に掲載されている詩及び文章のうち、各章の章扉に記載されている章のテーマが描かれている部分を抜きだし、SCATによりテーマを分析した。分析結果からの抜粋を表3に示す。

表3　無知の涙　SCAT　抜粋

番号	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
1	死のみ考えた者がいた　その者は若かった　青かった	死のみ考えた　青かった	死に取りつかれる　今振り返ってみる　浅い人生経験	人生経験の浅さ　選択肢の乏しさ　死は選択されやすい　後悔	死への囚われ　後悔	死を考えたのは人生経験の浅さだけだろうか
2	自殺ではなくして　死があった　成人になる前に　死を選んだ　なれど死ねなかった	死がある　成人になる前　死を選ぶ　死ねなかった	予定された死　若さのさなか　選択肢のない選択　死もままならず	生きることからの退却　生きることも死ぬこともできず	生きることからの退却　死も実現せず　行き着くところなし	
3	そして成人になって間もない今それを実行したら・・・・・・栄光があると信じている　その死は　自殺である	実行したら　栄光　自殺	今はかなわない自殺　汚名挽回	自殺における能動性への憧れ　死を美化	自殺による汚名挽回　しかし不可	
4	死にはいろいろある　病死　事故死　自殺　他殺　死ぬならば　安楽死―　誰しもこの死を考えるはずだ	死にはいろいろ　安楽死　誰しも	死に至る様々な道　苦しまずに死に至る方法　理想的	苦しまずに死にたい　でも実際には様々な死に方がある	理想　安楽死	
5	まず，何も考えず　なんの理由もなく　なぜ死ぬのかも分からず　助けも呼ばなく　苦しみもなく　そして死さえも意識せず　その時さえも知らず　突然消える　この地上から命の灯が消える	意識せず　突然消える	様々な想念を回避　苦しみを回避　予兆もない	死にまつわるあらゆる苦しみからの解放	理想としての安楽死　あらゆるものからの解放	
6	そして最悪の死　刑死である　こんな死に方……死んでも……死にきれない―　若者であれば　なおさら耐えられないだろう　苦しく悲しくもあろう	刑死　死んでも死にきれない　若者　耐えられない	刑死　屈辱的　若者には耐えられない	屈辱的な死　課せられたわが身	刑死　屈辱　嘆く我が身	
7	刑場に行く前に　石を投げられないだけましかも	石　投げられ	人として扱われない屈辱	屈辱的な最期を自嘲	人として扱われない最期　自嘲	
8	人間はいつか命を落とす　いや生物であれば　人間　動物　虫　魚　鳥　草　木　生物であればその他ｅｔｃ……総べて死がある	生物　総べて死がある	命あるものには死がある	死は自然なこと	死は自然なことであり，必ず訪れる	
9	人間は万物の霊長とかいわれ　考える能力を持っている　しかしその能力も苦痛と訴える者があるとする	考える　苦痛　訴え	意味づける　不幸	生　意味づける　苦悩	生を意味づける能力　苦悩を生む	彼を苦しめているものとは？
10	けれど，その者もその世界から　逃げることを出来ないことを知っている　認めざるを得ないのである	逃げる　できない　認めざるを得ない	苦悩　不可避	生の根源的苦悩	生の根源的苦悩　不可避	

11	そして知る　逃げるには死しかないことも―	逃げる　死	苦悩回避　死	死の消極的意義	回避としての死　道ある？	本人は消極的意義と捉えているのか？
12	こうしてみると　死とは　人間が最[再]出発する　たった一つの道かも[しれない]	死　再出発	死　苦悩回避　道程	あの世　幸せ	あの世　やり直し　希望　託してみる　絶望の結果	絶望とは書いていないが・・・
13	そうであってほしい余儀なく考え　行く所なのだから　近くその世界に探検に行くから	余儀なく　行く　探検	死後の世界　救い	極楽浄土　探検　救いある？	選択できない死　極楽を探検　あたして救いはあるのか？	「探検」に込めた意味　話の展開に乖離がある　不快から快に一挙に展開
14	死後の世界よ！！　ブラボー！！　そう叫び死にたい　そうあって欲しい？！	死後の世界　ブラボー！	死後　希望　可能性賭す？	死後　未知　不安の打消し	死後　不安の打消し仮の希望	
ストーリーライン（現時点で言えること）	生きることから退却し、死にとらわれて生きてきた。しかし死ぬこともできなかった。行き着くところが見いだせない。もし今、自殺が出来れば、汚名挽回ができるのだろうなと思うが、今の状況ではかなわない。様々な死があるが、自分を待っているのは刑死である。屈辱的な死である。そのような死しか選べなかった自分を自嘲しつつ、嘆く。生き物すべてに死が訪れる。それは自然なことではあるが、私は特別な意味を持たす。死は再生の道であると。人は生きることをさまざまに意味づけるために苦悩する。そう考えると、生は根源的な苦悩であると言える。したがってそこから逃れるには、死しかない。回避としての死である。生きることに絶望した結果、あの世でやり直す希望を、託さざるを得なかった。ましてや自分を待っているのは、選択できない刑死である。選択できないのだから人生のやり直しのできる「極楽」であって欲しい。とりあえずブラボーと言ってみる。しかし本当に極楽か？					
理論記述	・今までの行き方の振り返り。生きることからの退却、しかし死も選べず。行き場がない。 ・自殺できれば、汚名挽回できると思うが、許されない状況にある。 ・生きることはさまざまに意味づけることである故、苦悩となる。そこから逃れようとするなら死しかない。 ・自分に与えられた死は、屈辱的な刑死である。 ・選択できない死であるのだから、再出発できるような極楽であっても良いとの考え　しかし、これは不安の打消し？ ・死後の世界への希望と不安の混在					
さらに追究すべき点・課題	・本人は「回避」する姿勢のあることをどの程度意識しているのであろうか ・不快から快へ一挙に跳躍する考え方は、どこから生まれてくるのだろうか					

表３をもとに、どのようにテクストを分析したのか、具体的に示す。「死のみ考えた者がいた　その者は若かった　青かった」は、「死後に」という詩の１行目と２行目である。この作者は、自分のことを題材に詠んでいることが、『無知の涙』という作品全体をとおして理解できるので、この２行においても、死のみ考えた者とは作者のことをさすのであろうこと、自分の考えを回顧しているのであろうと考え、この１行に込められた作者の意図、感情を浮かび上がらせることにした。

この２行から、「死のみ考えた」、「青かった」を切片化した。「死のみ考えた」は哲学的に思索の対象としたというよりも、この作者の人生経験から「死」を願わずにはいられなかったことがあったと推察し、「死に取りつかれた」と言い替えた。また「青かった」は「浅い人生経験」とした。テクスト外の概念として、浅い人生経験と死が意識されやすいことが、どのように関係するのかを検討し、二つを結ぶものとして、人生経験の浅さからくる「選択肢の乏しさ」を加えた。また、この２行に、作者の言外の気持として、「後悔」が読み取れると考え、加えた。〈4〉のテーマ・構成概念について、〈3〉の一般化した概念でテクストを見直してみた。はたして、人生経験が浅いからと言って、悩んだ時に死に魅かれるだろうか。必ずしもそうではないであろう。だとするなら、死に魅かれやすい点は、この作者の特徴と考えられる。そこで、〈4〉には「死へのとらわれ」、「後悔」を記した。

3．結果

（ア）理論記述

理論記述のみ拾い上げて、まとめて記述したものを表４に示す。

表４　『無知の涙』理論記述

番号	年月日 章扉のテーマ	理論記述
1	1969.7.　2~1969.　8.4 死のみ考えた者がいた	・今までの行き方の振り返り。生きることからの退却、しかし死も選べず。行き場がない。 ・自殺できれば、汚名挽回できると思うが、許されない状況にある。 ・生きることはさまざまに意味づけることである故、苦悩となる。そこから逃れようとするなら死しかない。 ・自分に与えられた死は、屈辱的な刑死である。 ・選択できない死であるのだから、再出発できるような極楽であっても良いとの考え ・死後の世界への希望と不安の混在
2	1969.８．６～1969.9.　6 言葉と水の異なった中の自分	・若すぎる年齢の強いられた自立は、本人の意識も定まらず、孤立感・孤独感にさいなまれる。 ・金の卵ともてはやされながら、実体は過酷な労働で社会の下支え ・知らぬ間に性と暴力にまみれる社会の底辺の生活を余儀なくする。 ・異文化ではコミュニケーションがままならない。適応に困難をきたす。 ・孤立感・孤独感を感じながら、叱咤激励をして労働に励むが、限界を感じる。 ・貧乏ゆえ学問の道を断たれる。 ・夢と現実のギャップを感じている。 ・ままならない世の中の不条理を感じ、自分でもわからない力によって転落させられる。
3	1969.９．9～1969.　10.28 怒り憎め、そして愛せ	・自己の存在意義が見つからない。考え出すと出口がない。 ・絶対的な権力の前で、自己の卑小さを痛感する。権力に抗うことのみが自己の存在確認のように考える。 ・本来の自分を出そうとすると誤りのような気がして出せない。強大な力の前では出せなかった。そのことを悔やむ。 ・今なら自分の思想を出せるような気持ちと、助けもない、理論武装もできていない自分の力では無理だという気持ちで揺れる。 ・孤立無援であることも思い知らされる。孤立故、行く末もわからない。
4	1969.10.　29～1969.12.　12 ミミズのうた	・抑圧されて、思考の自由、表現の自由もあたえられていない。それは屈辱的で、自虐的にさせる。 ・権力により、泣く自由、死ぬ自由、さらには生きた証さえ奪われてしまう。その背後にある生きた証を残すことへの希求 ・最底辺にいる自分は抑圧され、表現する自由を奪われ、存在を無視される。この３項は連続して生じる。 ・攻撃ばかりでは生きていけないので、自己憐憫をかける ・しょせん無能者は地を這いずりまわり、踏みつけられるのを待つ。出過ぎると一貫の終わり。分相応をやぶると訪れるのは死滅。
5	1969.12.　12～1970.３．4 一番明るいところが一番暗くなる	・明かりは自己の憂いを支えてくれていた。明かりがなくなり気づく。 ・しかし暗闇を否定するのではない。暗闇は構想を展開する力がある。 ・看守と自分との関係　自殺に魅かれる自分と自殺させまいとする看守　自分と看守は死という想念を介して、密接にかかわり合っている。 ・看守に注目されていることで自己覚知が進む。 ・自分と網との関係　網は自殺予防のためにある。網をみると自殺を考えている自分を認識することが出来る。 ・烏の声も否定的な想念とはつながらない。（思考の肯定的傾向） ・明かりがつくことで内面の世界から外界の世界へ。両者をつなぐのは執筆という自己表現である。
6	1970.３．6～1970.４．12 あなた達へのしかえしのために	・キルケゴールを学び始め、人生を繊細に語る才能があることに気付く。 ・私の憂鬱は、人生の長きにわたり兄姉から生殺しにあわされてきたことによる。 ・この傷つきが私の憂鬱の源になっているが、深すぎて語れない。 ・今自分の語る才能に気付き、やっと兄姉に対抗する自信がつく。 ・両親も私は苦しめてきた。このようになったのも両親に責任があるので、両親に批判する権利はない。 ・兄姉を冷静な目で見ると、自分を傷つけてきた自己中心性は弱さゆえであったことがわかる。その自己中心性をいつの間にか自分も身につけた。 ・弱者のままでは終わりたくない。人生の巻き戻しとしての事件（一般化して意義付け）。 ・事件により自分の醜さを知り、再び憂鬱が始まる。 ・事件は同種の家族を生み出さないための警鐘としての意味もあったと思う。
7	1970.４．15～1970.５．20 幼い思想家	・学問をする喜びを見い出す。学問によりアイデンティティーを確認することができる。 ・哲学の世界に希望と怖れを感じる。 ・哲学の巨大な世界を前にして歯が立たず ・哲学は自分を再生させてくれる道・哲学をすることは容易ではないが、考えている行為をとおして自分の確からしさを感じることができる

8	1970.5．25～1970. 6.27 独りぼっちの革命家	・いつ、どこでも戦いの出る者は、戦いの意味（国家の意図）を知らされない。無知のまま、生活の為に殺しを繰り返す。罪悪感ないまま。 ・私は殺人犯となり、はじめて殺しが生活のためであることに気付く。今までの無知を悔やむ。 ・戦争を仕掛けている支配層は、手を汚さず、高みの見物 ・悲劇を生み出す富める者と貧しい者の権力構造はなくなることはない。 ・無知な私は一人で国家に戦いを挑んだ。負け戦に終わり、殺しが生活のためであることも伝えられず。
9	1970.7．4~1970.8. 26 空腹は未知を求める	・排除された一生。自分という存在が社会の中に位置づけられない寂しさあり。 ・自然を楽しむ余裕も生まれた。人との交わりは期待することもできない現実ではあるが。 ・学問をすることで悔やみや喜びが自然にわいてくる。涙も流れる。しかしこれは次に述べる無知の涙ではない。 ・無知を考えた末に、無知の奥深さにたどり着く。そのレベルには到達できないが、その事を考えているときに自分が確かにあることを確認する。
10	1970.9．4～1970.10. 30 “自己”への接近	・社会の権力構造ゆえ、自己が理解されないことを確認し、敵愾心が高まる。

理論記述から読み取れたことは、以下の６点である。

① 絶対的な権力者の前の無力な自分、貧しい者（番号３、４、８）

② 兄、姉、両親が自分を苦しめ、それに対抗することが出来ず、憂鬱になった（番号６）

③ 家族、国家への仕返しとしての事件（番号６、８）

④ 事件後、権力者に対して「共産主義宣言」で対抗する（番号10）

⑤ 社会が間違っているのか、自分が精神病なのか、統合しきれないものがある（番号10）

⑥ 実存哲学を学ぶことで、アイデンティティーを確認し、苦悩している自分に気付くことが出来た（番号７、９、10）

この６点から、事件を起こす前の自分の在り方について述べているもの（①、②）、事件の動機に関わる記述（③）と事件後に自己、社会について捉えたことについて記述しているもの（④、⑤、⑥）に分類し、前者をもとに図２「今までの生き方の振り返り」を、後者をもとに図３「自己存在の確認方法」を作成した。

図２では、絶対的権力者と自分との関係と（理論記述①）、家族と自分との関係（理論記述②）の類似性に着目して作成した。永山は、幼い頃から兄姉らに生殺しにあわされてきた。たとえば「理由もないのに（二男に）殴られるんだよね、ぼこぼこに殴られて、血を流して…ほとんど毎日」（堀川、前掲書）。兄から受けていた虐待について母は知っていたが、見て見ぬふりであった（堀川、前掲書）。〈この傷つきが私の憂鬱になっているが、深すぎて語れない〉注２）。永山は、兄姉の強大な力の前で、自分の自由な意思を出すことは出来ず、服従せざるを得なかった。抑圧されたこの体験は、社会における権力者と自分の関係に置き換わる。〈底辺にいる自分は抑圧され、表現する自由を奪われ、存在を無視される〉。〈権力により、泣く自由、死ぬ自由、さらには生きた証さえ奪われてしまう〉。

底辺にいる自分という存在は、家庭が貧乏であったため、〈学問の道を断たれ〉、〈若すぎる年齢の〉自立を強いられた、その結果である。兄、姉、両親から生殺しに合わされた結果、さらに絶対権力者から抑圧された私は、〈この世に行き場がなく〉、〈孤立感・孤独感〉を味わっている。

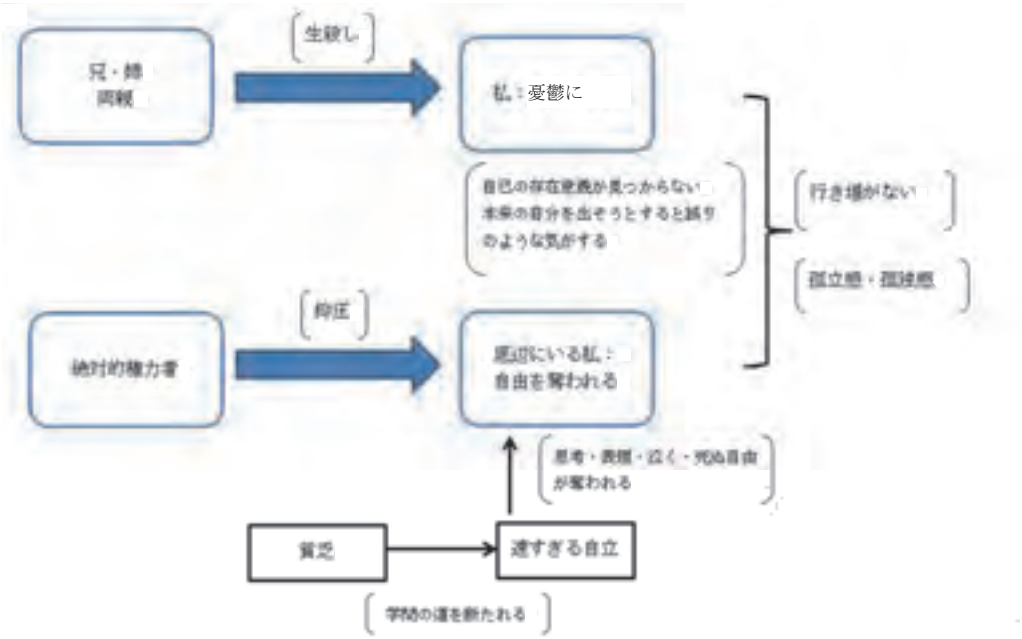


図２　無知の涙　ＳＣＡＴの結果の図式化（今までの生き方の振り返り）

図３「自己存在の確認方法」は、自己の存在を確認しようとして、抑圧され続けた私が、いかにして巻き戻しを図ろうとしたのか、その成行きはどうであったのかを示している。永山は、事件について〈巻き戻しを図ろうとして〉、〈あなた達へのしかえしのために〉、〈国家に戦いを挑んだ〉と位置づけている（理論記述③）。あなた達とは、兄姉、両親、そして権力者である。今まで自分を抑圧してきたものに立ち向かい、人生を巻き戻そうとした試みとして事件を位置づけている。

しかし永山は事件を起こしたことで再び憂鬱になる。そして哲学や社会科学を学ぶことで、自己、及び自己と社会との関係を模索し始める。その結果が〈共産主義宣言〉であり、実存的に自分と社会との関係を捉え直すことである（理論記述④）。

理論的拠り所を見出したからと言って、すぐに心の安定が得られるわけではなく、心のなかでは葛藤が生じる。それまで社会が悪いとして済ませてきたが、社会があやまっているのか、自分が精神的におかしいのかと悩むようになり、統合することができない。しかし実存主義哲学の知恵を借りることにより、苦悩している自分として統合的な見方をはかる（理論記述⑥）。

島が人とのつながりで、獄中にいながら外の世界とつながっていたことに対比させれば、永山は思索したことを発表することで外の世界とつながり、自己の確認を行っていたと考えられる。

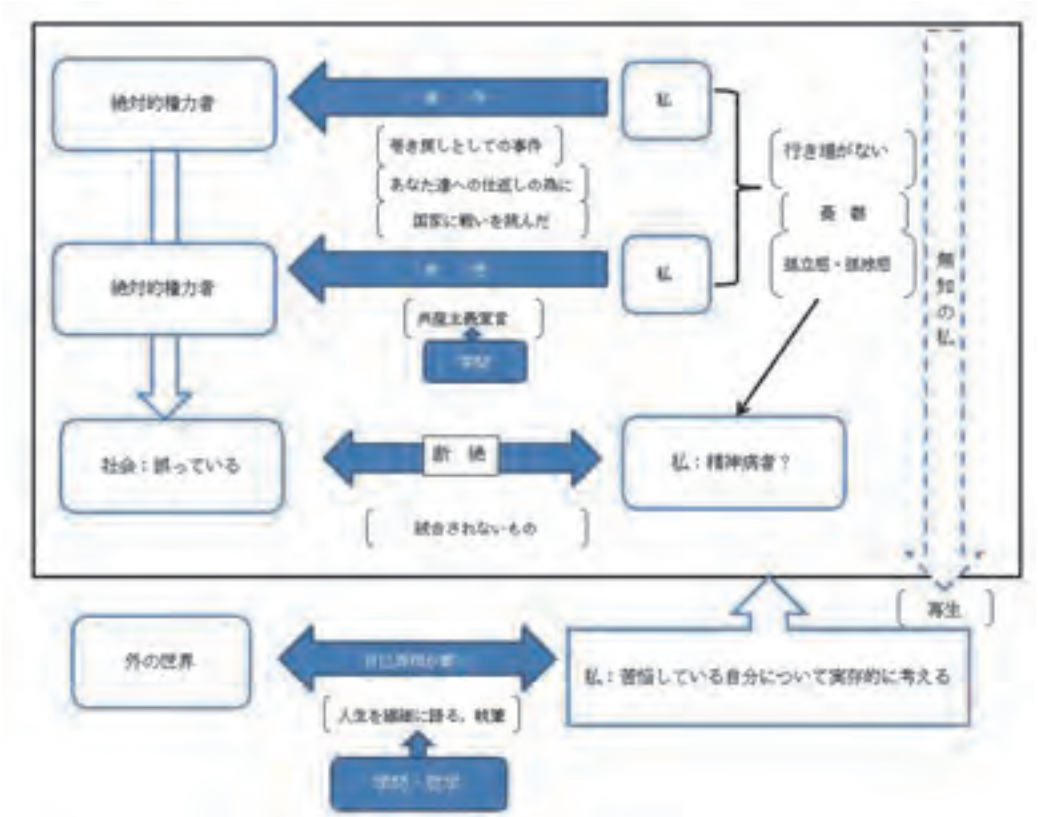


図３　無知の涙　ＳＣＡＴの結果の図式化（自己存在の確認方法）

４．考察

永山則夫はいかに自分の生を受け入れたのであろうか。結果を踏まえて、次のように考える。永山は、家族や近隣社会から虐待やいじめを受け、自己の存在価値をおとしめる経験を積んだ。兄姉には生殺しの目に合わされ、そして社会に出ても苦労を強いられる。人間関係がうまく行かず、就労生活につまずき、行き場がない孤立感・孤独感を感じる。しかしそれだけでなく、絶対的に力のある者から抑圧され、表現や思想、強いては生死の自由まで奪われていると感じるに至る。永山は、自分という存在を踏みつけにするような兄姉、そして国家に対して激しいうらみを感じるようになる。永山は、人生の巻き戻しを図るために、事件を起こしたと、事件を自分の中で位置づける。ところが、人生の巻き戻しは実現せず、かえって事件により自分の醜さを知ることになり、さらに憂鬱になる。

永山は牢獄の中で、哲学書を読み、感じたこと、考えたことをノートにしたためるようになる。キルケゴールを読むことにより、苦悩している自分について実存的に考えるようになる。その結果、悩みは簡単に解決できないが、悩んでいる自分自身は確かに存在すると感じることができるようになる。そして悩んでいること、感じ取ったことを繊細に表現できる才能が自分にはあることにも気づく。自己を表現することで、今まで対立的に捉えていた外の世界とつながることに気付く。

「幼い思想家」と題する詩から、考え、学ぶことの意義について気づき、生きることへの希望を持つようになったことがうかがえる。ただし永山の抱えている苦悩は、深い。実存的に考えることを始めたからと言って、すぐには解決できない。今やっと、自分の生をどのように受け入れようかと考え出した地点に立ったという状況であり、今後外の世界とどのようにつながることができるのかは、１人で思索するだけでは見いだせないのではないだろうか。伴走者が、必要になるのではないかと考える。

Ⅳ　総合考察

死刑囚は、自己の否定的側面のみを意識して死を待つだけではなく、残された生に何らかの肯定的な意味づけをすることがあるのではないかと考え、島秋人の『遺愛集』及び永山則夫の『無知の涙』の分析を行った。肯定的意味づけは、果たして生まれるのか否か、生まれるとするなら、どのようなプロセスから生まれるのか、考察する。

島は短歌を通じて、自分の感情を昇華させて世に伝えることに、生きる意義を見出した。短歌を詠んで島に関心を寄せた人の何人かと個人的に深い交流を結び、死の間際まで精神的に支えてもらうことが出来た。島は人とつながることで、自分の才能を開花させ、かつ残された生を豊かにすることを可能にしたと考える。

永山は思索すること、実存的に自己の生を捉えることに生きる手ごたえを感じた。また考えたことを表現することで外の世界につながることが出来ることを知った。しかし、まだまだ内面に抱える葛藤は大きく、心は整理しきれない。生の肯定的な意味づけというところまで至っていない。「生きる手ごたえ」のレベルである。しかし、正田の言うような否定的側面のみを意識して死を待つ姿勢ではない。永山には、内面世界を探索し、考えたことを発表することで、生きる手ごたえを得ていると考える。

島は情で人とつながり、永山は思索することで外の世界とつながる道を見出した。いずれもつながることが、生の肯定的意味づけへのキーワードになる。このことは、彼らが受刑者という世の中と断絶した状況に置かれているからだろうか。あるいは、つながることは受刑者でなくても死の有限性に気付いた者であるならば誰にとっても、重要な鍵になるのであろうか。本研究では、この点を明らかにすることが出来なかった。今後の課題としたい。

二つの作品を通して感じたことは、島秋人については人に対してつながりを強く求め続ける気持ちであり、永山については考え抜こうとする強い意志であった。このような強さがどこから生まれるのか。今ある資料から見えることは、二人とも自負するものを持っていた点である。島は短歌の才能のほかに人に慕われる性格であること、永山は知的能力の高さである。永山を支えた周囲の力があったのではないかと思われるが、そこまで明らかにすることが出来なかった。厳しい環境において、残された生をどのように肯定的に意味づけるのかについて、今後も多面的に検討したい。

注

1）本名は千葉覚であるが、作家としての「島秋人」を使用することにした。
2）理論記述から引用したものは、〈　〉で括った。

参考文献

1）稲村博（1973）：ある女子死刑囚の特異な精神障害について－１－症例の概要．精神医学、15（10）、1045－1062
2）福島章（1998）：死刑囚の心理．犯罪心理研究、２、１－７
3）加賀乙彦（1980）：死刑囚の記録．中公新書
4）パスカル著/前田陽一、由木康訳（1966）：世界の名著　パンセ．中央公論社.
5）永山則夫（1990）：無知の涙．河出書房新書.
6）島秋人（1974）：遺愛集．東京美術.
7）大谷尚（2011）：Steps for Coding and Theorization－明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法－．感性工学．10（3）、155－160
8）中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（1982）：角川古語大辞典　第１巻　角川書店.
9）広辞苑　第５版　岩波書店.
10）Winnicott,D.W.（1979）：Playing and Reality. Tavistock Publications　（橋本雅雄訳（1979）遊ぶことと現実．岩崎学術出版社）
11）堀川惠子（2013）：永山則夫　封印された鑑定記録．岩波書店.

Summary

Some previous studies about death-row inmates who received this final sentence focus only on the pathological aspects of the inmates. In this study, however, I deal with their positive aspects: for example, I expect that some death-row inmates may not spend the rest of their lives thinking only about their negative attributes but rather they may also seek to give meaning to their lives. I evaluate this hypothesis and clarify the different ways in which they may seek this meaning. On this theme, I analyze qualitatively the literary works of death-row inmates Shima Akito and Nagayama Norio, which support this hypothesis. Shima's works resonated with people even outside the prison, which led him to develop his skill of *tanka* (a traditional Japanese poem style) and live vividly through the readers' encouragement and admiration. In addition, Nagayama studied philosophy, which ultimately changed his understanding, existentially, of the meaning of his life. Like Shima, he knew he was able to connect to the outer world by expressing his thoughts and ideas. I conclude that it is important for both of them to seek meaning for the rest of their lives, positively connecting with others in the world.

【Key words】 death-row inmates, giving a positive meaning to one's life, positively connecting with others